

石の宝殿

この巨石碑は生石神社のご神体として祀られています。巨大な石はハイアロクラスタイトで、マグマと冷水の突然の接触によって形成された細かいガラス質の破片の集合体です。高さ 5.7 メートル、幅 6.4 メートル、厚さ 7.2 メートルあります。重さは約 45 万 3000 キログラムと推定されます。この巨石は、岩盤の三面の空洞から立ち上がり、そのうちの 1 面には三角錐型の突起があります。碑と岩盤の間は人一人が通れるほどの幅があり、少額の料金の巨石全体を一周することができます。

石の宝殿は水たまりの上で見えにくい柱の上にあるため、石が水の上に浮かんでいるように見えます。。古くからその特徴的な姿と特異な位置から神聖なものと考えられ、地元では「浮石」とも呼ばれています。

近くに竜山 1 号墳があります。これは石の宝殿に関係する人物の墓と考えられています。

起源の物語

この巨石は約 1,300 年前の記録にこの場所にあったとされていますが、その理由や石の重要性は不明です。多くの謎がそれを取り巻いています。伝説によると、古代、オオナムチとスクナヒコナという

名前の二人の神が、平和をもたらすために出雲（現在の島根県）から、不穏な状況にあった後の播磨（現在の兵庫県）に派遣されました。ある日、彼らは調和を促進する石造りの宮殿を建てる許可を与えられましたが、その地域を蹂躪した播磨の神々の反乱によってその努力は妨げられました。

反乱が鎮圧されるまでに夜が明け、建物は未完成のままでした。それでも、二人の神は、自分たちの魂はその残された巨大な岩の一つに宿り、永遠に土地を平定すると宣言しました。現在、この岩は石の宝殿として知られています。

国家的重要性

石の宝殿は、713 年から 717 年にわたって天皇に提出された、現在の兵庫県に当たる地域の年刊の書籍である、播磨国風土記に記載されています。風土記によると、この巨石は 6 世紀の高位氏族の当主、物部守屋が聖徳太子の命を受けて造ったとされていますが、その理由は明らかにされていません。

江戸時代（1603 ～ 1867 年）の記録によると、生石神社には多くの影響力のある人々が訪れ、その中にはドイツ人医師で植物学者のフィリップ フランツ フォン シーボルト（1796 ～ 1866 年）も含まれており、シーボルトは彼の日本についての著書の 1 つに、この岩の 3 つの詳細なスケッチを掲載しています。20 世紀以来、この巨石は霊的なエネルギーが湧き出る場所として考えられ

ており、「日本三奇」の一つに数えられています。

2017 年、石の宝殿とその近くにある古墳時代（約 250 ～ 552 年）の竜山石採石場が合わせて国の史跡に指定されました。指定区域は約 11 ヘクタールで、49 件の文化財からなる貴重な遺産です。